

●優秀賞

「成りきり」社会科学習の ススメ

たなべもとひろ
鹿児島県鹿児島市立和田小学校 田邊源裕



1. はじめに

小学校3、4年生の社会科学習は地域学習が中心であるので、機会をみつけては地域に足を運び、自分の目で耳で確かめる学習を行うことが多かった。そのため、子どもたちの意欲もかなり高いのが見られた。しかし、5年生の社会科学習は産業学習が中心であるので、教科書や資料集などの「調べ学習」中心の授業になりがちで、子どもたちも教室から出ることも少なくなる。自ずと、子どもたちの意欲もトーンダウンすることになる。また、教科書や資料集のみで、様々な産業に携わる人々の思いや生き様にまで迫ることができるかという、なかなかそうはいかないように思える。

そこで、今回、かつお船や森林などの「現場」に行かなくても、学校の範囲内で「現場」に近い状態にし、そこで「働く人」や「モノ」に成りきる疑似体験を行うことで、これまでの教科書や資料集などの「調べ学習」中心の授業から脱却でき、子どもたちが生き生きと授業で活躍できるのではないかと考えた。

2. 成りきるための疑似体験の開発

(1) これから学習する内容を理解するために 行う「成りきり」学習

「基盤の疑似体験」

私の勤務校は、商業地と住宅地を併せ持った校区である。5年生の子どもたちにとり、農業や

水産業、工業など生活からは離れたものである。例えば、かつお漁についての情報を文字や映像で得たとしても、子どもたちは十分に内容を理解することはできないと考えられる。

そこで、文字や映像による情報の内容を理解しやすくするために、小単元の比較的早い段階で「疑似体験」させる。「疑似体験」した中で、子どもたちから出た疑問や考えを教科書や資料集などで調べていくことで、学習する内容の理解がスムーズにいくものと考えられる。

本実践では、小単元「水産業のさかんな枕崎市」において、「かつおの一本づり」の「成りきり」学習を報告したい。

(2) これまで学習した内容を理解するために 行う「成りきり」学習

「検証の疑似体験」

学習した内容を実際にやってみる活動である。教科書や資料集など文字や映像などで学習したものを確かなものにするために、調べ学習の後に「疑似体験」させる。教科書や資料集で学習した「知っている」内容が、「疑似体験」を通して実感することにより、確かなものとしてスムーズに「分かった」内容に変わっていくのである。

そこで、子どもたちが学習した内容のどの部分が理解しにくいのかをもとに、どのような「疑似体験」を組むかが、教師の側に求められる。

本実践では、小単元「わたしたちの生活と森林」

において「森林の土」と「間伐材」の「成りきり」学習を報告したい。

3. これから学習する内容を理解するために 行う「成りきり」学習の実践

【事例：小単元「水産業のさかな枕崎市」】

この小単元の「成りきり」学習は、かつおの一本ぶりの疑似体験である。そのためには、子どもたちに、「かつおの一本ぶりをやってみたい。」という気持ちをもたせなくてはならない。そこで、教室に「かつお」「かつお一本ぶり用のさお」を持ち込んだ。

(1) かつおが教室にやってきた

かつおを丸ごと教室に持ち込んだ途端、教室中が「わー。」という歓声に包まれた。かつおに子どもたちの目は釘づけになった。子どもたちからは、

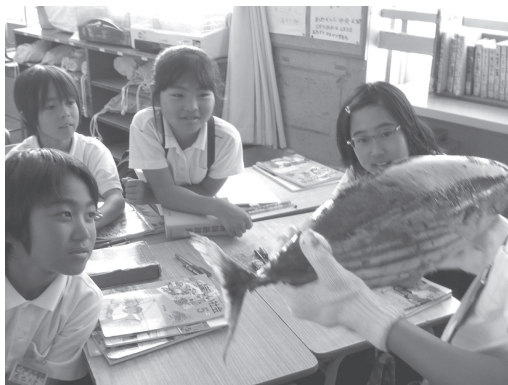
「このかつお、どこから持ってきたのですか。」

「どのようにしてつったのですか。」

「何kgあるのですか。」

など、矢継ぎ早に質問が出た。

そこで、このかつおは、鹿児島市から約40km、車で1時間ほど行った枕崎市の漁港から持ってきたこと、一本ぶりして、重さは約4kgあることを伝えた。



●写真1 / かつおに目が釘づけの子どもたち

(2) つりざおにふれる

すかさず、子どもたちからどんなさおなのか見てみたい、という声が上がった。

長さ約4m、カーボン製のさおを提示する。手にした子どもから出た言葉は、「軽い。」「折れないのかな。」という言葉であった。

なお、このつりざおは枕崎漁業協同組合所有のかつお一本ぶり船に備え付けのさおを借用してきたものである。交代でつりざおを手にした子どもたちは、

「つりざおの柄の持つ部分にテープが巻かれているから、すべりにくいんだよ。」

「つり糸の先についている針は、大きいね。それに、魚のような形をしているよ。」

「針は、鳥の羽や赤や青色の固い布が縫いつけてあって、とても派手だね。」

「ぼくのつりざおには、つり糸をまくりールがついているけど、これにはないね。」

など、口々に言っていた。しかし、多くの子どもたちは、このつりざおでかつおがつれるのか、つりざおは折れないのかということを心配そうに言っていた。



●写真2 / つりざおを手にする子ども

(3) 基盤の疑似体験：「かつおの一本ぶり」 の漁師に成りきる

「先生、かつおをつってみたい。」

子どもたちから声があがった。4kgのかつおやかつお用のつり竿にふれる活動を通して、子どもたち自ら、かつおの一本ぶりの疑似体験を



●写真3 / 見事にかつおをつりあげる子ども

申し出てきた。

事前に枕崎市の南薩地域地場産業振興センターから、かつおの一本釣り体験用のさおと3kgのかつおの模型(テント用の布を縫い合わせて作成)を借用した。さらに、ヘルメットと腹当てまでもセットになっている。

いよいよ、校庭の朝礼台をかつお船に見立てて、かつおの一本釣りの疑似体験の開始である。かっこうは、かつおの一本釣りの漁師に成りきっているが、腕がついていかない。かつおをなかなかつりあげることができない。また、ヘルメットや腹当てを着ける理由もよくわからない。そこで、教科書『新編 新しい社会 5上』(東京書籍)のP22の写真「かつお一本釣り」やP24の写真「かつお一本釣り船」を見て、漁師さんがどのようにしてかつおをつっているかを調べるこ

とにした。すると、子どもたちからは次のような発表があった。

「漁師さんは、腰を落としてかつおをつりあげているよ。」

「腹当てにさおを押し当てるといいのかもしれないよ。」

「つりあげた後は、体を後ろまでそらしているよ。」

「かつお用のはりは、はずれやすいように、かえしがありませんと書いています。つったかつおを後ろにもっていくと、はりからかつおがはずれるのかもね。」

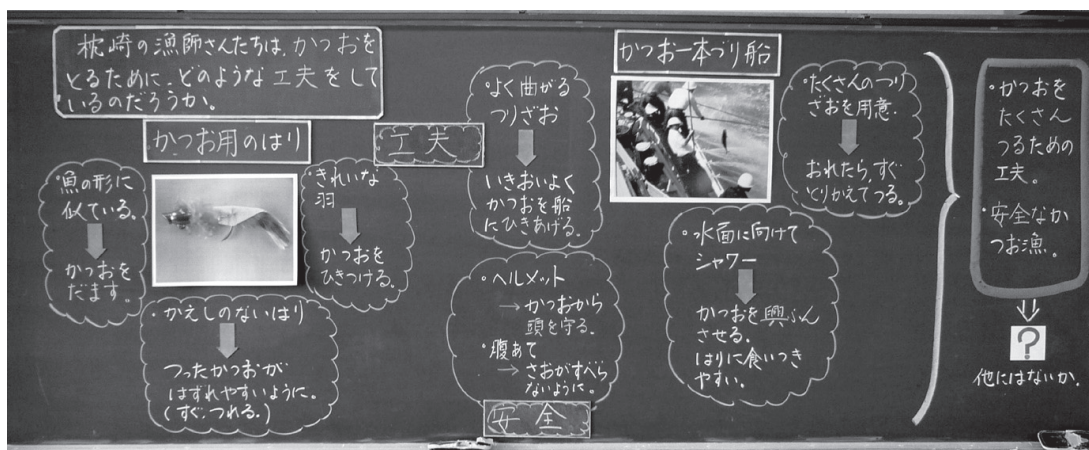
「かつおをつりあげたとき、自分の頭にあたっても大丈夫のようにヘルメットをかぶるんだ。」

これらの発表をもとに、かつおをつるコツを知った子どもたち。先ほどとは違い、見事にかつおをつりあげていった。子どもたちなりに、「かつおの一本釣り」の漁師に成りきった瞬間であった。

全員が、かつおの一本釣りの疑似体験を終えた後、漁師さんたちの工夫についてまとめていった。子どもたちは、「はり」「つりざお」「ヘルメット」「腹当て」と自分たちが疑似体験したことをもとに、それぞれの働きについてまとめていった。

特につりざおについては、

「つりざおがよく曲がるのは、いきおいよくかつおを船にひきあげるため。」という工夫に気づいた。



●写真4 / かつおの一本釣りの漁師に成りきった学習を通しての板書

また、ヘルメットは、かつおから頭を守るため、腹当ては、さおがすべらず、かつおをつりあげやすいようにという安全面に気づいてくれた。この疑似体験を通して学習したことをまとめたのが次の板書である。

4. これまで学習した内容を理解するために行う「成りきり」学習の実践

【事例：小单元「わたしたちの生活と森林」】

(1) 日置森林組合青年林業士伊地知さんとの出会い

鹿児島市に隣接する日置市で青年林業士として、日々「健全な森林づくり」に携わっている伊地知さんとの出会いは、子どもたちにとって衝撃的であった。地下足袋に作業着とまさに、「山のお仕事」の格好で登場し、開口一番、「いい山にするには、どんどん木を切ることなのです。」という言葉に、子どもたち、戸惑いの表情を浮かべた。森林のよさや伊地知さんの仕事内容についておおまかな話を聞くことができた。

この話をもとに、「森林のはたらき」と「森林で働く人の仕事」について調べることにした。



●写真5 / 青年林業士伊地知さんとの出会い

(2) 検証の疑似体験：「森林の土」に成りきる

森林のよさをさらに詳しく知るために「水資源の涵養、土砂崩れの防止、木材の供給、空気の浄化、生き物のすみか、憩いの場」という6視点から1つを選択し、より詳しく調べるという興味・関心に応じた課題選択学習を行った。



●写真6 / 森林の土に触れる

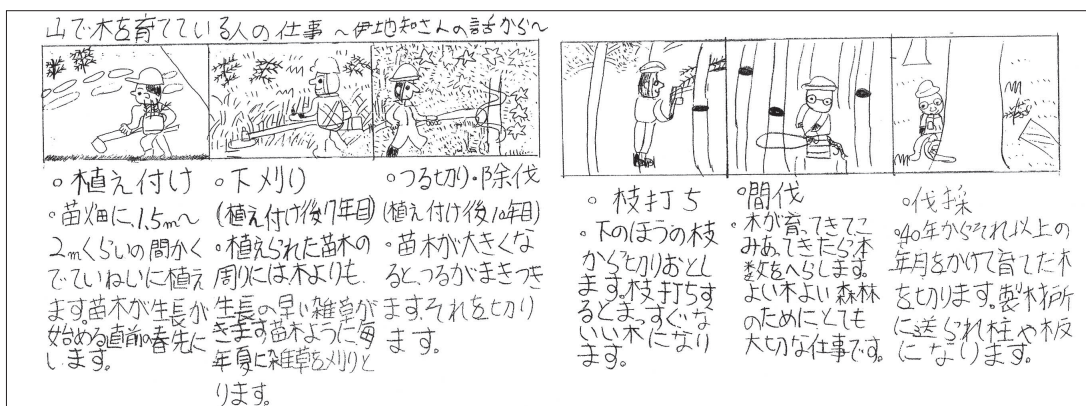


●写真7 / きれいな水を作り出す実験

「水資源の涵養」について調べた子どもたちは、学校近くの林に足を運び「森林の土」に実際に触れ、採取してきた。「森林の土はひんやりしている。」「普通の土と違って水気が多いようだ。」「ふわふわしている。スポンジのようだ。」など、校庭や花壇の土と森林の土は明らかに違うことに気付いた。「水資源の涵養」つまり、きれいな水を作り出す働きのある「森林の土」について学級の仲間に分かってもらうために、一つの実験を学級で行った。

コーヒーフィルターに校庭の土と採取した森林の土をそれぞれ入れ、その上から水を注いでみるという実験である。子どもたちは、次のような説明をした。

「上から雨が降ってきました。校庭の土にしみこんだ水と、森林の土にしみこんだ水、どちらがきれいな水となって下のピーカーに垂れてくる



●作品1／森林で働く人の仕事

でしょうか。」

水を注ぐと、教室から「へえー、森林の土のほうさがきれいな水が流れてくるんだ。」というつぶやきがあちこちから聞こえた。

コーヒーフilterを森林の土に成りきらせ、水を注ぐことで、森林の働きの一つ「水資源の涵養」の理解をより深いものとした。

(3) 検証の疑似体験：「間伐材」に成りきる

「森林で働く人の仕事」をまとめた作品である。教科書や資料集をもとに、それぞれの仕事をコンパクトにまとめてはいるが、子どもたちの理解を確かなものにするために、伊地知さんに説明をいただいた。

特に、「間伐」について説明する際、子どもたち全員を木に見立て、「間伐」という作業を疑似体験させていただいた。伊地知さんは、次のようなことを言いながら「間伐」の作業を進めていった。

「間伐は、木の大きさに応じて、計画的に何回か行われます。あなたは、間伐されるけど、これでおしまいではないのよ。ほら、本箱に生まれ変わります。あなたは、木のいすとして生まれ変わります。間伐した木の大きさにあわせた使い方をして、私たち人間の生活に役立っているのです。」

間伐されることにマイナスイメージをもっていた子どもたちであったが、間伐されることは決して無駄ではないことを理解していった。さらに、

伊地知さんの話は続く。

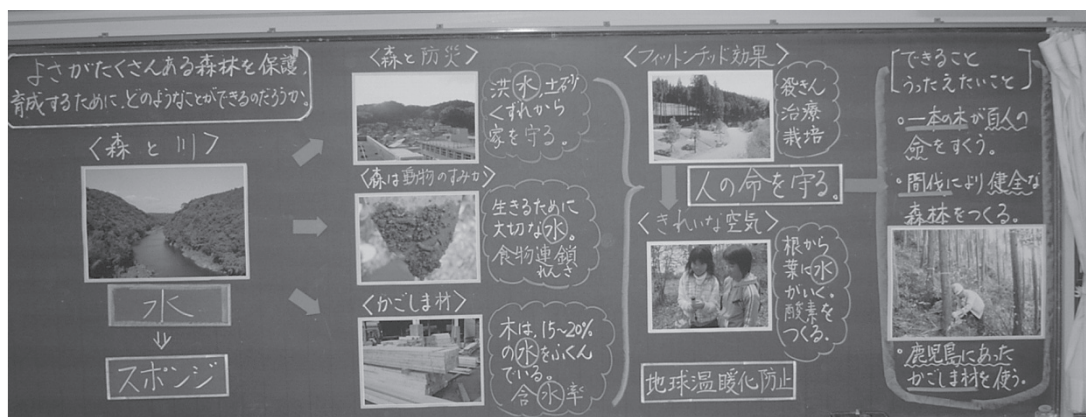
「間伐が終わりました。見てごらん。間伐されずに、残ったみなさん。お日様の光をいっぱい浴びて、どんどん大きくなりますよ。でも、忘れていけないのは、あなたたちは、間伐されたみなさんのおかげで、このようにすくすくと成長したのですよ。」



●写真8／間伐材に成りきる



●写真9／生まれ変わる間伐材



●写真 10 / 森林のよさとそこで働く人の仕事をまとめた板書

計画的な間伐は、健全な森林づくりには必要なことであり、間伐した木も人間の生活に役立っていることを実感することができた。

間伐材に成りきることで、伊地知さんの森林に対する思いや願いに触れ、森林を守り育てている人々の工夫や努力を共感的に受け止めることができたのである。

子どもたちの調べ学習や伊地知さんの話、そして、間伐の疑似体験を通してまとめたのが次の板書である。

授業を通して子どもたちは、「うたえたいこと」として次のようなことを述べた。

- 一本の木が百人の命をすくう。(森林の働きを学んで)
- 間伐により健全な森林をつくる。(森林で働く人の仕事を学んで)
- 鹿児島にあったかごしま材を使う。(森林の働きと森林で働く人の仕事を学んで)

国民の一人として、森林の保護、育成に取り組むことが、住みやすい国づくりにつながることを、子どもたちは分かってくれたようである。「間伐材」の疑似体験を通して、「知っている」ことから「分かった」に変わったのである。

5. 「成りきり」社会科学習のススメ

(1) 直接体験できないものでも、疑似体験ならば学校内で手軽にできる。

「かつおの一本ぶり」は、漁師でなければできないことである。しかし、今回のように、つりざおとかつおの模型があれば手軽にできる。この2つについては、自作でも可能である。他の5年生小単元として、「米づくりのさかんな庄内平野」ではバケツ稲づくりを、「自動車をつくる工業」では自動車の模型作りという疑似体験を行ったが比較的、手軽にできる。この手軽さが、授業に取り入れてみようという教師の思いにつながる。

(2) 疑似体験することにより、社会的な見方・考え方を深めることができる。

「かつおの一本ぶり」を疑似体験することで、かつおをつる漁師さんの動きや身に付けているものの意味を実感することができた。そして、実感したことを教科書や資料集で調べることで、「かつおの一本ぶり」をする漁師さんの思いに共感することができた。また、「森林の土」や「間伐材」を疑似体験することで、森林の働きとしての水の涵養や間伐に対する見方・考え方が調べ学習の時よりも確実に変わった。特に、間伐することが健全な森林づくりには欠かせないものであるということを、自分たちが「間伐材」に成りきることで納得できた。

自分と違う立場の人の考えを推理したり想像したり、「モノ」になりきることでその「モノ」の働きや存在する意味を知ることができる。そして、同じ疑似体験をした友達の見方・考え方を交流し、共有することによって、さらにを深めることになる。

6. 「成りきり」社会科学習をよりスムーズに行うために

(1) 「モノ」のネットワーク、「人」のネットワークを構築していく。

疑似体験を行う際、「臨場感」というものは、かなりのウエイトを占める。かつおの一本づりの雰囲気を出すためにも、つりざおとかつおの模型は不可欠のものである。さらに、ヘルメット、腹当てで、関係する道具を身に付けることで、まるでかつおの一本づり漁師になったかのような気分で疑似体験ができる。

また、青年林業士伊地知さんの登場が、「間伐材」の疑似体験を支えるものであった。教材研究の取材中に伊地知さんとは知り合い、ゲストティーチャーとして授業にも入っていただき、専門的な立場での疑似体験のコーディネートを行っていただいた。

このように、「モノ」のネットワーク、「人」のネットワークを構築しておけば、年度が替わっても、小単元の指導計画の中に入れ込んでおくことが可能になる。

(2) 子どもたちの生活と学習とのつながりをさらに太くする疑似体験を開発する。

子どもたちは、これまでの自分の生活とのかかわりをもとに、実感をもって疑似体験したり、さらには、疑似体験したことを生活に生かしたりしていく。今回の実践で疑似体験の効果は見えてきたが、最初に疑似体験ありきではない。

子どもたちの生活やこれまでの学習を踏まえ、「この子どもたちが、この疑似体験に出会ったらどのような学び方をするか」という教師の授業に対する読みが大切になってくる。

子どもの学びの過程を大切にしたい問題解決過程と一体的に考えた疑似体験を開発していくようにしたい。

7. おわりに

「なす事によって学ぶ」という言葉がある。まさに疑似体験の大切さを述べている言葉である。今回、これから学習する内容を理解するために行う「成りきり」学習としての「基盤の疑似体験」とこれまで学習した内容を理解するために行う「成りきり」学習としての「検証の疑似体験」を提案した。授業を通して、この2つの疑似体験は授業で有効に活用できることが明らかになった。

子どもたちにとり、教科書や資料集の写真や文字等でしか知ることのできなかったことが、疑似体験に没頭していくことで驚き、疑問、思い、こだわりとなって、子どもたちの社会的な見方・考え方を深め、自分なりに獲得した知識として身に付いたものと考えられる。今後も子どもの学びの過程を第一に考えながら、価値ある疑似体験の開発に努めたい。